

ひやうをん

# 義経

辰の春角座  
神靈菅原道實記  
當り言戎座  
忠臣藏毎日替里

- 卷中俳優人名
- 右團治
- 珊瑚郎
- 駒之助
- 團之助
- 璃笑
- 延五郎
- 延三郎
- 鰻太郎
- 壽三郎
- 鰻十郎
- 八百藏

評者 南北槽連

○サラハお待兼の評判記と書立るハ手前自慢でも何んでも御坐らん横連の投書と社中の金太郎の○獲り眼で耳カッポソリ觀さう聞たり仕た儘と茲又鶴と御覺入升而已されハ此場と饒ッて斯賞てと看官のお腹お適らぬお鎗があらハ何本なりとも記者の宅まで御投書あさ次編よそを記載すべし杯と送告條の評判記者の三番叟で五坐る

南北横連の名代 ままの舎述

○神靈菅原道實記(序幕)の例のお預りとして「序切」國綱館は段よと始満利サヨ一國綱(榮治郎)可成の出来さどナト造りが壯年過さり茲へ院の御所方來る使者友房「多三郎」安近(鶴五郎)一ト通ッ綾子(國之助)容貌もよ一充分なきと臺詞廻しのナト利過ました「彌治馬」近頃ハ己が該坐の立女形ヒヤト云意が見へる「ヒイキ」イヤ夫の貫目の出来たのヒヤ○夢の覺る場庭前朝顔後背の遠見 櫻よ 梅の盛りヲ澤山書割朝顔の垣を仕さど如何の譯ク國峰(珊瑚郎)國之(嚴笑)の兄弟さしたる事あし同立田(家女)上出来の方駒下駄と濡す杯の注意よし時平の兒侍時又(助藏)奇麗く袋附刷毛先との割ハ是は藏十郎の好みと見受さリ(綾子)時平が許へ赴く際ハ被布ヲ着た

儘出かりたのは如何ある譯歟時平の名よおふ左大臣マア夫も可として國綱より誰か  
在綾子が乗物の準備イマセ一ト云臺詞が有とふあもの造物時平の閑居と替り太郎  
(駒の助)次郎(藏太郎)の兄弟雨花道々來て一寸割臺詞有て仕丁の(助藏)一暗闘模様  
の立廻り可成受ました(次郎)丈の打柄ハ評あり三段目よて合評すべし(助)ハ上  
出来の方(八百藏代り珊瑚郎)閑室にて綾子と囀ひ仕丁のガンドゥツと吹消てハ幕切迄  
別ハ評あし ○道明寺の場 板附四人の尼大歌舞伎く 荊屋姫(助藏)の足外輪よ  
て思入が湖どの評□姫君と云思入充分有たし(八百藏)覺壽ハ四五年程以前ハ角と堀  
江みて菜種の御供ハ勤められた時とハ餘程趣向も上達して胡麻毛のハマキ茶筌の芝  
翫茶の巻立もオット古風ハ藍鼠と替へ髪も充分細くして掌先迄砥の紛仕立と塗られ  
ぬハ五注意く□併し紫縮緬の法衣で山た所ハ如何歟二段目の彌婆母としか見得ぬ  
との評○愛ひも充分答へた○菅三と愛する事餘り仕過られたり菅公風待の期限迫り  
迎ひよ來る眞興(寛三郎)四五年見ぬ間にメツキリ藝がイヤチ年が寄ました□番附  
を見て必定舞臺も奇麗と思ひの外一向花もさく藝の腹もあとの評○珊瑚郎よさし  
てハ如何との評者もあり○此場の雜子都て受ましたら道具に纂評あり幕明の金襴ハ

一向寺院の粧ひあく道明寺といへる丸で、大内某の館に覺壽や尼さんが来て居る機あど云投書の有ツムが斯論と迂生如き淺見記者れ及ぶ所に非ず○爰へ菅三丸と伴ひ来る白太夫(皷十郎)白髪頭に木刀を造りけ胸差年配といひ神職の情有て如何も白太夫は彼の様なお人で有るふあど大受の賞状□ニマが愛ひは今少しとの評道具替わて木像彫刻の場○総繪木造の二重香輪梅彫の欄間庭先網代堀何をも感腹くまかし後の花鳥の金襴の些と不評願曰ハ蠟色藤白張襖は梅鉢の金箔にして貰ひ鯛○一面雪降の体獨吟にて覺壽來り障子開けハ相照(右團治)餘念あく木像を刻み居玉ふ見得如何にも殊勝に見へて始めかろとろり看客お痛しひト云情と起立しめ徐く泣始めした者も有ましと夫より段々覺壽の頼み依り詞をのりの名残と許されしト聞て切戸の外ハ菊屋姫(助瀧)を始め花子(家女)由かり(巖笑)薫る(多三郎)白菊(扇舛)の四人の切髪腰衣尼の打粉めて互ひよ尼とありし身の上とかの愁嘆を聞いて(右)譏者の無慈悲を怨み五人は嫁娘を惘然と思ふ氣味合の所○餘り體を動かさずして仕らさしは適れ感腹□尼さん達ハ別段評をし先一通り○跡明りと消して菅三への對面よ「成人の後ハ必ずす一天の君に忠節と盡せよ」と岐度いそれハ飽迄忠節の熱

意見へて無類の大出来○夫より木像ノ光明輝く事有てド、返しお成迄申分更あし何れも上評ハ内殿十郎の白太夫(春彦)の打粉最も上での評 ○道具替つて二重の御殿造り正面遠見の雲割茲へ迎ひに来る眞奥善友兩人の内延五郎の善友ハ願上評太掉お合して菊屋姫及び四人の尼離盃同流石大歌舞伎○扇升の尼は腰元の尼しと思わさず○鷄鳴お成り相照名残を惜み徐くと花道への引込通例の道明寺の様ハ自來也もささの三味線を附す是又新工風お行れしはお功者く□しかし戸屋口の手前で右手の装束を槍扇めてキリくツト窓附け根めしとふよ本舞臺と眺め足早お這入るしハ故人菊五郎以來誰もとる形物とたハ癖眼うこれ雪紅梅の幕外にあり(右)の跡ハ這入る白太夫流石老功の貫目ありとの評口都て此場は一日中の眼目内外共に評判吉○船の場百性(鶴五郎團若菜治郎)三人菅公の出船を惜しみ手製の團子を捧る所鳥渡且蓮記の趣あり道眞苦船より出玉ひ百性お畫像と認め與へられる階(白太夫)シット白紙を押へて居るお庭見へたり爰へ島田太郎(駒の助)來り花道の真中よて「御主君はハア」と左遷と歎き悲しむ所骨折つて演られぬ故堪たり○濡衣の爲お預りの大金をつかひ果せし事を付入る間今少し落附てはしいとの評茲へ弟の郎次(皷太郎)が來

て太郎が身の不始末を詫るを耳も掛す心の腐つた兄上も言葉交すも穢しむト思  
口と吐く所あかしく功者に出來升が少一手強よ過るトの評○ト、此兄弟が碇の立廻  
りお成所建よ上出來看客の受け吉○出船の段切お成り兄弟船を今暫ま止り氣味  
合ト、善友(延五郎)が鏡を斬拂ひ船の下手へ出帆する所と出過者チツト天船お  
楫が無けり如何譯か○東西へ楫船は次第遠見あり向ふへ這入る其内正面の岩  
臺と廻り舞臺の端と浪打際となし兄弟遙か向ふと見詰名残りを惜む所駒の助の浪打  
際で何遍とさく後巡りする度わ「サ、」の聲思入もひつこいとの評答体此  
の太郎と志津馬と勘平と混合した様を濡事師もへあり六ッヶま役也との助言  
もあり何分浪打際の仕打丈は道外役めさたり(千鳥と引揚しての幕切の模様頗る大  
受く)○作次の宅世話場の体寺子と百姓二人の仕出し有ッて太郎の露衣(團の助)を  
連れ來り兄の戻りと待折のト大兄の作治(八百瀧)鼠に割羽織お千筋の襦高袴出て出  
よなる○此衣装お議論色々あり牽着渡しの方お賛成多し○成程跡下着の二枚も重た  
衣装と變り出したが見れを家内も無人と容子道具のその以前を察して可也とした所  
がチト不都合の所多し愛の投書の如く源藏ト云思入が善かるウとの評 ○併し藝ハ

第一等○太郎露絹とも情愛頗る妙別して吉○爰へ次郎と俱み來る妻の梅の井  
(多三郎)別品なをを藝も御出精が○次郎(織太郎)の小倉の半袴は維新前の武士と一  
か見へず矢張古風お打扮がよほどの評父兄の太郎に素氣おくる處奇妙也○道具替  
ト奥坐敷の体 太郎は身の誤りを後悔お一切腹せんとする止めて露絹が床お合し  
てサワリの振とサラくとして吉○奥作次(八百瀧)立山態と次郎の事を嘲ける間  
次郎の下手の柴垣も忍び荒縞の着流しで立聞く處ハ「知ッ顔」山林房八と云見立ハ  
如何○ト、次郎と怒お堪おね「斯まで盡す拙者の忠義と兄上おお汲取下さるや  
此上ハ切腹なして忠義魂お眼に掛んとキツト云處○得意の腕前上出來○作次の之  
と止メ切腹せよとは次郎でなぬ兄の太郎へカケテの言葉と聞イテ太郎ハ「ソッヤ兄  
者人おと拙者が身の上を不審くらよ(丸白藏)の顔と眺める(八)おふんでおろウカ  
年の違ふト扱襟をいて坐る處看客一統入受々く」○夫が上手に祀ある布袋の置物の  
社を拜一九寸五分乘三寶持出處神樂離ハ「神職某住家ト云ふ見へるとの評  
○太郎切腹せんと九寸五分を挿頂こき中身竹筴手答輕云思入鳥渡吉○作次切腹  
が唯善くとの評判なれと餘り苦しむが大層過て大丈夫の武士に不似合とふり謙

腹の趣あり□藝道に當特第一等されど此割腹後の例の前當りで受かねる所もあり中にも外記左エ門櫓ひの颯よりマヒと舞ふ杯ハ○東西ノ市中遠近とも評判上吉ハ二段目ハ碓り此場の切腹に次れ笑ひ六ノ目の配所と天拜山の仕掛と○飛んで聞の扇の衣装ト云内の一場を色バ御妙は御見物と乞ハ○イヨ一是ハ五尤も五勉強感心○時平の館茲ハ綾子(團之助)櫻遊覽の体腰元此花(巖笑)乳母吳竹(扇舛)侍女四人のいて出成り時平の中に兒の出来ハ筋と云處皆さしたる事なし奇麗な事吳竹瀧ハ腦ハ和子綾子ハ渡し皆這入る○跡ハ申上舛ト走り出たる仕丁太郎又(實ハ太郎)駒の助(白)の狩衣ハ薄土(茶)の假紋白揚藤の花繁さ眞斗目の着附走と誠によい打粉でムリ舛ハ此形の後世迄残して置キ鯛の吉評(愛ハ國峯(珊瑚郎)來リ異母綾子ハ男見れ間光一ト通りでおました(新町猫連茲ト云的込の場ハあかつたので殘念ナツ

○太郎又(駒)の助(團)の國峯が異見を餘所ながし聞終り綾子の前に諫言成し和兒を人質ハ取ツて時平の胸中を探れと詰寄る處確かり出来増多□去とぞ和兒の泣の鳥帽子を見せての引込ハ場當り過るとの評○跡ハ清貫(猿藏)希世(美寛)定國(團若)管(棋)榮等の公家前後よして胡蝶に戯むれなハ花道ハ來る藤原

の時平(八百藏)人品萬端大極上出来□イヤ五尤も千萬をぞ着附が田舎源氏の光氏と黃門記の堀田と合併一ノ櫓では受かぬ舛○小理届の投書ハ御免ノ楮清貫始め都合四人の敵投ハ廊の遊びを真似る滑稽れ一段ハ頗る大受け作者の御注意感腹ノ希世の美寛ハ太夫の振ハ臍がよれる程味ほどの事○道具大廣間ト成り以前の國峯ハ言号の此花ハ出逢ハ人知れず時平を殺害せよと言ハ含める處さしたる事ハ此花の姿ハ頗る麗一ウリ○信又道具時平が閨房と替り獨吟ムツレて此花必ハ來リ戀ハ事寄せ時平と討さんト謀れド希世等の密告にて知るを知らぬト見せ色合有ツてド、此花を扱打ハする處奇妙なり愛ハ綾子ハ來て時平の惡逆を諫むれと聞入モ女如きの知る事ハトすト振袖拂ハ早舞の鳴物よて這入る迄何れモ充分の出来○又御殿の道具ハ替國峯太郎の兩人時平の惡意と殘らずさり聞峯ハ父國綱ハ告ん爲め太郎ハ直ぐハ筑紫の配所へ趣かんト双方兩花道へ這入る遙か奥より時平前黃織の裝束にて徐々出成る處實ハ大舞臺○綾子又諫言して遂る自害とる迄別段評論ナ□時平ハ櫻ハ散ると眺めて「散る花ハ光を添て久かたの月も曇りで雲の上かち」ト一首と詠じ是より禁庭

へ糸内せんとどの臺詞の間を笙羯鼓入れば離子よきと今に國綱とも流罪よせんト云長文句の間坐頭の貫目充分ド、嬰兒の顔と綾子の死骸と打眺めての笑ひ○時平の笑ひくど評判の割にの些と□又ヒッコイと云投書もあり△奇妙と云評もあり先御手柄切落と都て配所の道具古びたる品物の好み大受けく、白太夫次の間お焚火しながら袖人(猿蓑)(寛三郎)に菅公の御身の上と物語る處茶色所々綿の出た布子あ古ひ織物の甚平二段目の時より顔のこしへもマツトやつれた王合感服實お近來の出來爰は菅公(右團治)唯何となく病ひも疲勞たる思入○此場の衣装は西京より態々取寄られた時代の裝束下着の白無垢まで垢屬たる好み寔お感腹すべて斯ありたさもれなり白太夫觀世首へ參詣お行く跡お相承ウツく、毘故郷の空と望み帝の龍顏を拜し度しどなゆかしさよ堪かね落涙の處國家と思ふ赤心見へて貴族とも感心されたり暫して白太夫がくくよて立歸る處へ太郎拔身おて來り、白と顔見合し君の謔居と聞いて嘆息しおがく本舞臺お懸付けける所眞寔かか太郎といふ心持で演られし故甲分おしお上るり「白太夫の兩子おツのへ都お島田太郎參り候と問いて相承而都をやわらげ

○ナニ太郎が尋ね來りしとナアト急お嬉しお思入頗る上出來○主従思わす泣落しの仕打て又格別の上評○太郎(駒の助)は姿と正し中々以て君の御赦免思ひも寄らすト都の事情を委ましく物語セリフ奈何おも口惜ひト云處見へお餘り花麗過るトの評□奈何よも演劇として居る氣味おれを看客の感お發せず○相承之を聞畢り(右)時平が爲罪せらるしを悔み今まで柔和の相承が怒らせ玉ふ處奇妙○武彦の活首と曳拔お欄間お手とりけての見へよて幕切迄玉揃ひの功見得たり榮治郎も中々出來升○天拜山の場正面黒雲の遠見カヅリの岩板お若松を植附り花道の溪崗の拵へ舞臺真中お嶮岨ある山又巖此上お白の八足臺と扣るへ柿色の裝束にて竹の先お附たる告文を捧げ禱の見得よろしくおつてド、告文と讀上る内騒がまき鳴物を用ひお自然と雨催の仕掛たり中々新工風く實地お見るよふでいた○當時斯お發明の東京の菊五郎丈と當れ高島屋丈の兩雄おとんと記者迄無數の賞狀雷光の仕掛も眼覺しおと無類の評判○後世へ傳へるよふ委敷正本と遺し置たる物○告文と宙お捲上る處え太郎白太夫の兩人走來て花道の抜穴を潜り岩お躡登り相承の死骸お取附ら愁え沈む處兩人とも大受○正面天幕の間お觀音に屏開くと相承半姿と顯し又元の死骸に移ての幕切迄別段評お

し□チット正面の上より太鼓板の捨て顔を突出すのわ無理雲の幕を上下之出と最  
一ツ体載よくいたい物(駈付る兩人の内島田太郎と先ふして白太夫の跡かゝ行方吉  
○七段目比叡山中堂の場 平舞臺の護摩檀お法性坊(八百瀬)祈りの所□緋の襟立衣  
お指貫と用ひた々奈何と思ひ升た○茲へ役僧來たり相承該御刹へ來らざる事と告る  
と相承は五ヶ年以前筑紫おて薨去あり一筈なるに今又茲へ入來の筈あしと法性坊不  
審りる所へ下モ手より詔々への装束おて最モ面やゆれたる打粉よて相承顯れ出(身  
は西海よ謫せされ耻か一めを九族に及すとも敢て之と念とせず君忠の爲よ身命を投  
打天お訴へ天帝の御難を救ひ奉つらん)ト法性坊に物語りの間天拜山とい又音調  
の變り目ありて至極よろしく法性坊は天帝より勅使來たらむ是非參内致さねば  
ざる旨を語り相承の意中と推しての愛ひ奈何も大和尚の貫目は充分□坊主と師匠  
からのお譲りにて大受々○友房(珊瑚)眞興(寛)外四人の僧侶とも別段評する程の事  
あし○ト、七度半の勅使に余義あく法性坊參内せんとすると怒りドクくよて相承  
又顯れ口惜しむといふこあし烈しき雷鳴の鳴物にて柘榴を口よ噛とへ火焰を吹出し  
中釣よあるよ足の裏より詔々への雷火と發する事物凄く講采の聲は實お雷鳴よりも

烈しかりし遂お悪人時平亡び倭人皆々處分せられる件にて打出し逸例も大詰り看客  
が飽倦ものあきと此度の大切な大切ななつてうと看物隔りうへよ充滿せし一入高島屋丈  
なり一坐の御手柄ト記者謹で賀す  
○大切(所作事)閨の扇廊寶惠駕 ○正面塗り椽の障子の障子の裡よて唄  
「假初の夢の浮寐の仇枕下零」と半七翁の聲へも又奇麗(右團治)傾城雛鶴始の襦は  
鶴龜の總金糸縫美事く机其他の小道具何れも大張込み舞技の妙術の記者から申込  
もなく看客の知らるる所へ云わぬの云ふよ彌増さる又襦黒 天鵝絨総金銀の簾椽  
薰珠のベタ縫お變り花道へ八文字と切ての引込みギロくしてまをい位であつた  
正面の造物番引揚ると天瀧宮の遠見向ふよ一坐総出の寶惠駕花やか 太鼓持篤八  
(右團治)五ツ面の手踊と新發明大受け八百瀬丈の仲居お松の別して御苦勞よ存する  
□之レ丈ケは外の趣向に替て如何(決まて格好が悪るのつと申ので御坐らん)  
其他の一坐何れも小手利々よて目出度チヨンくの打出し評判頼むぞくそ  
の評判よりこの評判記澤山御購求下されかしとホ、チ敬 つて稟よあん  
我坐忠臣藏毎日替り零評 鹽 谷 判 官

○璃笑は総て葉村やを寫されし故喧嘩場ハ少し強過ぎた櫛子四段目ハナト下品なとの評判もあきと落附たる仕打よろし○延三郎之義家の得意にて二々場とも受ま一た判官と共筒やが第一等○壽三郎と余程骨折つて仕られた故申分ないが途こや若狭れ助の趣も聊さきよしもあらず○珊瑚郎と萬事未廣やの聲色で大當り  
○師直は評の預り  
早野勘平

○延三郎ハ三段目門外おかるとの戯言上出来ニツ玉一ト通り六ツ目腹切ふ成つてからは小兵故余り壯年見へ過ぎと併し仕打お於て申分あし○璃笑ハ三段目大に宜敷ニツ玉璃寛丈其儘六ツ目よく出来まし○珊瑚郎三段目ハナト中位ハ五ツ目六ツ目充分の出来別して腹切はお功者勘平ハ未廣や丈が一の當り壽三郎は三ツ目左程よもなし五ツ目五ア月代で出られ所驚愕する程の好男子であつた六ツ目意外の上出来  
一文字や才兵衛

○璃笑は面白い顔の拵らへて中々手輕ふてよし才兵衛は橘屋丈へ團扇があがり升た○延三郎も中々よふ饒舌くれ升○壽三郎素直した色氣あしの拵らへ大よよー○珊瑚郎は舞臺を大切お身を入れてせられし故一ト際面白ふ御坐と升○オットー  
○璃笑のハ祇園町の百性といふ評もあり  
斧 定 九 郎

○璃笑と余程手強よくこゝろされしが何分體が疲て居るので最一ツ答たへ兼て残念  
延三郎ハおもひの外こゝろされ升た○珊瑚郎と體が立派ふて一割得があり升仕打も奇妙で一た○壽三郎ハ奈何も定九郎ハ斯様な男かど見へ升た黄金改ためる所杯も大受け定九郎ハ此の先生止メさし升た(ムダ口)止メと刺さ與一兵衛が蘇生る○エ  
大星 由 良 の 助

○延三郎ハ花道の駈附より後城渡し成つてがら落附たる仕打中々のお手柄○壽三郎と從前かく摺元しのお役は平常も看客が見習て居る故別してよろし花道の真中へ坐ときた所の中々買目がありました城渡しもれ功者く○珊瑚郎ハ打扮萬端宗十郎もどきでやられ判官の傍より「委細承知仕るの間だ未廣や」と聲が掛り升た○璃笑ハ花道の駈附よりうよよの切髪となり四ツ間の處上出来城渡しも随分こゝろさし  
ご何よの看客の目途の違ふかして評判薄し先此の役ハ延三壽三珊瑚三人のお手柄

明治十三年二月廿八日出版御届  
同 年三月 日刻成出版

編輯兼出版人

大坂府平民 (定價四錢)  
榎野儀三郎  
南區鹽谷西の町

賣 棚 書 林

劇場珍報筋書出版局  
芝居番附見立出版元

華本文昌堂本店  
玉 置 清 七



正誤

初丁(裏)五行目

は覺るあり

二の丁(表)十一行目

塗られぬの塗るたの誤

三の丁(裏)四行目

四人の尼離盃同の離盃の間の間違ひ

同 八行目

見さのの見と是の方を脱したり

同 (裏)五行目

楯の假名うのはかじれ間違ひ

五の丁(裏)三行目

先御手柄の此六字は扱死舛

五の丁(裏)四行目

配所筑紫の配所の事

特67

353

074893-000-5

特67-353

評判記

南北 櫓連/評

M13

CEK-0326

